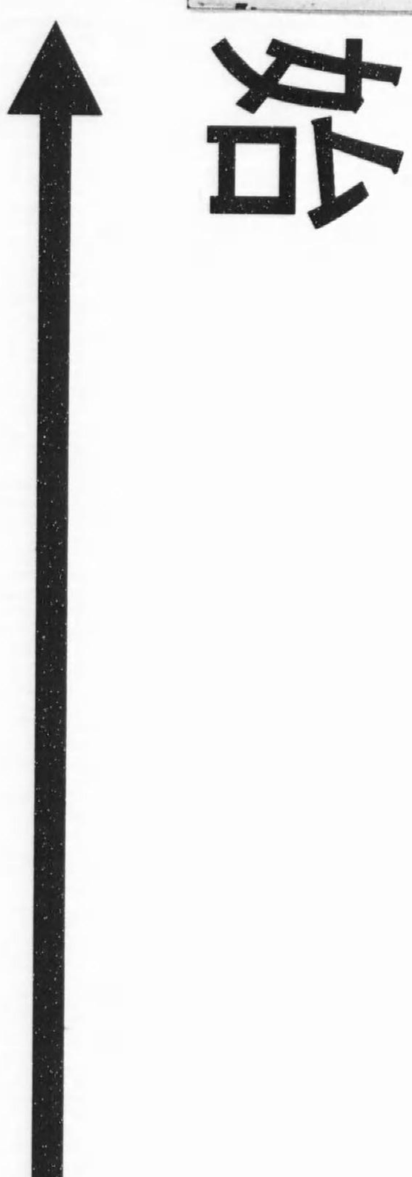
特216
662



特216
662

富田城址

富田城址（普通月山（ぐわつさん）城址）が山陰地方の史蹟として大に誇るべきものであるのに、未だ普く全國的に知られないことは我輩地方民の等しく遺憾とする所であります。然るに今般文部省から史蹟保存地として指定せられたのは我史學研究上最も喜ばしいことであります。

由來富田城に在つた城主は、何れも直接皇室に關係もなく歴史上除りに重く視られてゐないのに、何故そんなに騒ぐ必要があるかと評する人があるかも圖られないから、先づ以て主なる點丈けについて冒頭一言を陳べて置くことゝ致します。

抑〻郷土に關係のない一般の人々に對しても大に參考になることは何であるかを述べるが順序と思ひます。で先づ第一にこの富田城は昔の山城（さんじやう）そのまゝが今尚歴然と殘つて居り而かもそれが極めて高大で今日他では視られない程、稀な城址であることを知つて頂きたい。現今多くの城址といつてゐるのは、彼の豐臣秀吉時代から後に出來た天守閣のある城址であつて名古屋城を始め大阪城、岡山城、高松城、松江の千鳥城の如き石垣を斜に積み

上げて周圍に堀を廻らした普通に城と唱へらるものゝみを指しますが、この富田城はそれ等よりも四百年以前からあつた城であります。今日普通天守閣のある城は總て平城（ひらじろ）といつて多くは平野又は海岸に築かれてあるが、この平城の出來るまでは山城といつて自然の山を型取つて築いたものであります。然るに其山城なるものは多くは臨時に陣を構へた場所であるから、永久的に築いたのは殆んどなく、只山河の形勢からこの邊に陣取つたものであらう位の想像しか出來ません。源平時代の戰史によく何々の柵といふのがあるは、つまりこの種の城に當ります。

ところがこの富田城は山城中でも永久的に築かれ、それが平家の部將景清が築いたと傳へられてゐます。景清が果して築いたかどうかは疑問になつてゐるも兎に角この時代に出來て以來約四百年間、中國唯一の堅城として天守閣時代まで活動したことは爭はれない事實であり、從つて他の山城の如く只山河自然のものでなくて平城と殆んど同樣に澤山の石垣を以て圍んであります。勿論自然の險崖には石垣はないが其險崖中必要の所は帶の如く幅狹く横に長い石垣を取り廻したのもあります。又城構へが只城主一族の保壘のみでなく

家臣一同郎黨の家宅をも全部保護すべき城廓に作られてあるから左右の谷々迄も悉くこれ城内に屬してゐるので城址地域が非常に膨大であることが亦特徴であります。故に文部省で申請書の書類地籍臺帳地圖等を調べるのに斯くも廣大複雜な調書は未曾有であるとまでいはれた位であります。其構造は大要左記の通りであるから軍事上築城法等の參考には珍しいものと稱せられてゐます。

次にこの城が山陰山陽十一ヶ國を領し石高（こくだか）二百餘万石で中國に覇權を握つて居つたことも素より輕視すべからざるものであるが、特に落城後之を回復しやうとして終世奮鬪した忠勇義烈の武士山中鹿介（しかのすけ）の遺跡であることが大なる誇であります。嘗て勝海舟が我邦古今の武士中眞に英傑と稱すべき人は大石良雄と山中鹿介の二人のみと斷定せられ、賴山陽も山陰の麒麟と評せられました。けれども惜いかな彼等は皇室に關係なく陪臣であつたから國家の功勞者と認められない學校の教科書にもなく正史にも載らないやうな有樣であります。

されど彼れが粉骨碎身主君の爲め此城を回復せんが爲めに他の殆んど全部の家臣が支離

滅裂四散したにも拘はらず獨り義を完うし幾十度か浮沈の難關を潜り抜け甲部川で首を斬らるゝまでも惡戰苦鬪を續けた其忠魂義膽は眞に儒夫をして立たしむるもの万代の龜鑑と謂はねばなりません。而かも大石良雄の如きは最後の目的は達したるも其中途策謀であつたとはいへ放縱浮華の遊蕩も極められたが、幸盛に至つては終始一貫全く斯る遊蕩もなく徹頭徹尾武裝を解かなかつたことは實に武將の權化ともいふべきであります。

今や我邦は未曾有の國難に直面してゐます若しも現在の國民中最後の勝敗如何を打算して敵國にでも降服するやうな者が出で來るならば國難打開は到底望まれないことになります。飽くまでも不屈不撓殉國の覺悟を以て精忠を致さねばなりません。この意味に於て我輩はこの幸盛公の忠精を普く國民の腦裏に浸潤せしめ徹底的に英魂の感化を與へることは目下の一大重要事業であると斷じます。

惟ふに大石良雄は既に縣社として祀られてあるから、之と同一境遇に在つた幸盛公も亦神社として其遺跡に祀られ武神として國民に崇敬せらるゝに至ることも決して遠くはあるまいと確信するものであります。

この二大特徴を有する富田城址を天下に紹介することは國民精神作興上最も緊要の義務と思ひます。どうか全國の學生、軍人、青年諸賢よ一度はこの尊重すべき靈地に來られて是非大和魂の精髄を感受せられんことを切に悃願致します。

昭和八年十一月十八日

島根縣能義郡廣瀬町
月山保勝會長　並河榮四郎

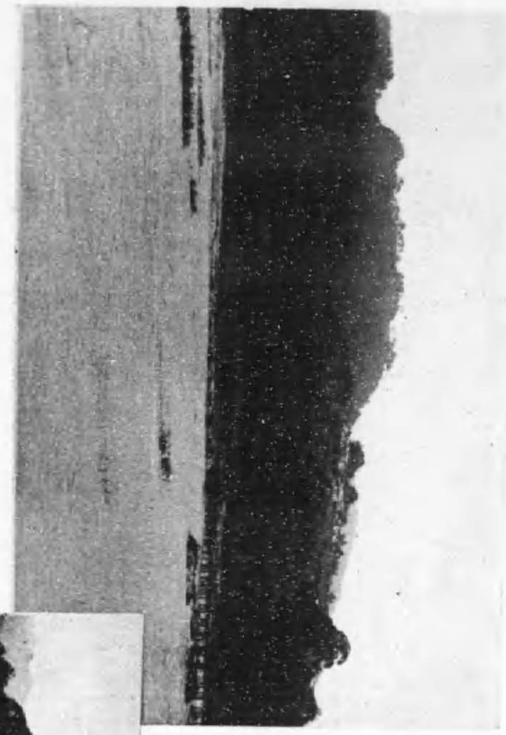
謹言

目次

富田城の沿革……一
富田城の一般的構成……六
一、富田城の位置概説……六
二、富田城の築城概説……七
三、富田城の通路……九
富田城の部分的構成……一一
其の一
一、外廓の防備形式……一一
二、千疊ヶ平並に其附近……一二

三、塩谷口方面……一四
其の二
一、内廓……一五
其の三
一、甲の丸……一九
軍用井戸調査……二一
富田城趾石垣調査……二二
堀尾吉晴の墓石調査……二五

富田城址（部幾）



↑ 飯梨川を距て、富田城址を眺む中央に高く牛馬の峯は甲ノ丸にして右方に茶亭等の見ゆるは太鼓櫓なり

↓ 富田城址より飯梨川を距て廣瀬町市街を望む左方松子守社にして河に架せるは鉄筋コンクリートの富田橋なり

富田城沿革

保元平治の頃平氏の部將藤原景清（悪七兵衛）富田莊に來り城きたるを初めとす、これより出雲の國廳政治此の地に移れり、次て佐々木義清（五郎左衛門）文治元年十二月隱岐守に任し出雲隱岐の守護となり、來りて富田城に入るこれを出雲守護の始めとす、建保元年五月和田義盛の亂に義清戰死し第五子義泰（四郎左衛門）富田に居り富田氏と稱せりこれより佐々木氏の族國中に蔓延し後世の京極氏尼子氏等も皆其裔なり。

塩谷高貞の死せるや足利氏出雲隱岐を佐々木高氏に與ふ、高氏は同族吉田嚴覺を以て目代とし富田に在りて國政を監せしむ。

山名時氏、足利氏に屬して五國の守護を兼領す其子時義家を繼ぐに及びて一族の領する所十一州に跨り世に六分の一公と稱せり。

元中六年時義卒し姪滿幸出雲隱岐及丹後を領す滿幸乃ち塩冶師高を以て出雲の目代として富田城に居らしむ。

京極高詮は佐々木高氏の第三子高光の子なり元中九年出雲隱岐飛彈及び近江半國を賜ふ高詮隱岐秀重を以て出雲の守護代とす後姪尼子持久を守護代とし七百貫の邑を給して富田城に居らしむ。これ出雲尼子氏の始めとす。

持久自ら一切經を謄寫して之を城西の山上に埋め名つけて經塚といひ以て子孫の永福を祈れり。

持久の子清定京極氏に逐はれ流離して死す、清定の二子經久、義勝父祖の業を恢復せんとし義故を糾合し富田の賤民を募り授くるに計を以てし、文明十八年正月元日遂に之を畧取す。

經久塩谷氏を滅し龜嵩の三澤氏を降す、三刀屋赤名の諸城皆風を臨んで來歸す出雲悉く平らぎ山陰諸國靡然として響應す、次で毛利吉川武田氏も悉く尼子氏に屬し大永中に至りては尼子氏の領土因伯雲隱石播作三備藝の十一州に跨り關西に雄視せらる之を富田城の全盛時代とす。

嫡孫晴久政を執るに及び諸將を遇すること無狀なりしかば毛利元就去りて大内氏に屬す天文九年晴久五万人に將として安藝に入り元就を吉田城に攻む。大内氏の援軍來るに會し大敗して遁れ歸る之より尼子氏の威望頓に墜ち諸將叛くもの多し十年十一月經久卒す年八十四（現に塩谷に墓あり）

十一年正月大内義隆尼子の叛將を以て先導とし五万人に將として先づ安藝備後を畧し進んで赤名城を陷れ來りて京羅木山に陣し富田城に迫る、陶隆房は經塚山に陣し毛利元就は宮尾に陣し義隆の寵臣田子兵庫は三澤三刀屋の諸叛將を率いて八幡山に陣し大に兵勢を誇示せり、時に天文十二年二月なり三月敵我が蓮池口及洞光寺を攻む、互に勝敗あり已にして我が叛將又來りて屬す、敵軍驚き義隆狼狽揖屋より舟にて逃れ去る晴久勝に乘じて追擊し東西諸州を回復し尋て八州の守護となれり。

弘治元年毛利元就大内氏を滅し漸く我を謀る晴久毛利氏よりの間者に欺かれ股肱の重鎭たる新宮黨を族滅せしかば之より我兵振はざるに至れり。

永祿元年元就石見を畧し三澤、三刀屋、赤名城を降し五年十一月進みて洗合山（今の松江）に築き本營となし漸く富田に迫る十二月晴久俄かに卒す、六年八月元就白鹿城を圍みて陷れ

進んで水陸の要路を阨し我糧道を絶つ、城中漸く苦しむ。

八年四月元就大擧して三面より攻む自ら小森口（現今お子守口といふ）に向ひ吉川吉春は塩谷口に向ひ小早川隆景は菅谷口に向ふ晴久の長子義久は自ら元就に當り弟倫久は元春に當り秀久は隆景に當る、終日接戰決せず元就曰く堅城勁敵力を以て取るべからずと遂に兵を引き洗合に歸れり。

九月再び來り牙營を石原瀧山（今の勝山）に建て連珠塞を設けて益〻糧道を嚴禁せしかば城兵逃れ降る者相繼ぐ、明年元就病む使を以て義久を招く義久兄弟遂に支ふべからざるを知りて降る、毛利氏之を安藝に幽す、經久富田城を取りしより此に至るまで八十一年にして城遂に陷落す。

永祿十二年尼子氏の舊臣山中幸盛、新宮國久の孫勝久を擁して義故を糾合し出雲十五城を連下し兵勢大に振ふ、元就急を聞き吉川小早川をして出雲に向はしむ幸盛等衆を悉くして布辨山に拒き敗走す。是より兵勢挫け勝久幸盛雲伯因但に出沒轉戰すること數年遂に京師に入り織田氏の先鋒となりて上月城を守りしも利あらずして勝久自殺し幸盛殺され尼子

氏全く滅びたり。

毛利元就已に大内尼子二氏の領土を併せ十三州を領し部將天野隆重をして富田城を守らしむ毛利氏の織田氏と戰ふに及びては吉川元春常に富田城を根據として山陰道を總管せり。元春去りし後弟元秋元康相繼ぎて此に治す。天正十九年豐臣氏毛利氏に諭して雲伯數郡を元春の第三子廣家に割與せしむるに及び廣家來りて富田城を治す。關原の役毛利氏封を削らるゝに及び去りて岩國に移れり。富田城毛利氏に屬せしこと永祿九年より此に至るまで三十五年なり。

關ヶ原の役堀尾吉晴石田氏の刺客の爲めに重創を蒙り軍に從ふこと能はず子忠氏父に代りて從軍し功あり事平の後出雲隱岐二十三万五千石に封ぜられ來りて富田城に治す、吉晴世を忠氏に讓りて老を養ふ、忠氏曰く富田は險なりと雖も四方山多し尼子氏の亡びしは敵京羅木山に陣して此城を俯瞰せしが故なり且つ天正以來砲戰漸く行はる敵若し四方の山に據らば銃丸容易に城中に達すこれ將來の城地にあらずと乃ち城を末次極樂寺山に移さんとして偶々病死す。

子忠晴幼弱なるを以て吉晴再び出でゝ國政を執り城を移す、實に慶長十六年なり明年吉晴卒す、忠晴大阪冬夏の役に從軍して共に功あり寛永十年十月江戸に卒す、嗣子なく國除かる、堀尾氏富田に居ること十一年景清城を築きしより四百餘年にして遂に墟となれり。

富田城の一般的構成

一、富田城の位置概說＝富田城址は廣瀨町大字富田にあり飯梨川（富田川ともいふ）の右岸に位す、月山を主とし四隣に聯絡せる鹽谷新宮谷の一區域を包括し隣地丘陵とは谿谷を以て截然たる天然的區劃をなす、此區域内を總稱して富田城といふ。

抑〻廣瀨の地たる三方山を以て圍まれ飯梨川其中央を貫き北東の一方僅かに開けて遙に中ノ海に連る、地域廣からずと雖も險要の地なり、殊に城山は高さ僅に六百メートル弱三方の連山より瞰下せらるゝの不利あれども谿中に孤立して山容嶮峻削るが如く、以て當時の雄風を想見するに足るべし。

城山より廣瀨盆地を隔てゝ北方一帶の山彙中の高きものには京羅木山、勝山等あり之

往年大内毛利等が富田城攻圍の際本陣を置きし處、尙西には三笠山、駒返峠東南には大辻山あり此等の山彙によりて圍まれたるものは則ち廣瀨の盆地にして此盆地中に屹立せる小山彙は即ち富田本城址なり、飯梨川は寛文六年の洪水によりて流域を變じ當時の市街は城山の麓なる今の川床の地位に當り之に反して今の廣瀨町は舊時の流域にして其面影を見ずと雖も彼の品川大膳、山中幸盛格鬪の遺蹟は今尙ほ田圃の中に在り。

二、富田城の築城概說＝富田城は鎌倉時代の初期築城以來慶長五年（紀元二、二六〇年）毛利氏改易に至る四百餘年間幾多の城主交迭と共に戰國時代を經過したるを以て我國築城術の進歩につれ築城上の改築擴張の之に伴ふもの多くあり、唯今日に於ては其何れの部分を何れの時代に於て改增せしかは史料を缺如するを以て的確に知り難しと雖も其城跡地より發掘する瓦に數種あるを見ても疑なき處なり、其の一例をいへば城跡地最下段なる大皷壇の東方平地を奥書院址と稱し之に通ずる城安寺側の道を奥書院通りと稱す、然るに此より四町許りの奥部城山麓に隣接したる所にも亦通稱御殿平（ごてんなり）と稱する大なる平地あり故に下段の奥書院は初め奥御殿なりしも後年御殿平の增築せらるゝに當りて奥書

院の實を失ひたるものゝ如し之れ即ち時代と共に變遷したる例證なり。

富田本城の甲の丸の位置する部分を古昔勝日山と稱す、之れ未だ築城せられざる以前已に勝日高守神社の鎮座せしを以てなり此山を月山又は吐月山と稱せるは廣瀬方面より見て明月山上より出づるを以てなり。

本城は景清之を築きたりしも尼子經久に至りて其規模を擴張し城郭を修築し塹濠を深くし大小の邸宅は山上山下附近の丘陵に連り市街は遠く中海に達す其下馬札は今の中津にありしといへり。

本城は自然の地勢を利用し築城したる山城なり故に人工を從とし地形を主とせり、山頂に一ノ平、二ノ平、三ノ平を置き、順次に内外郭を作り外郭に蔽はれて居館を構へたれば本丸より城下を一畔の裡に收め得ると共に外郭の壯觀四圍を壓するの要あり、尤も初期には單郭式山城なりしが其後複郭式山城となり、彼の「洴澼百金方」に單郭式は城壁の一ヶ所破るれば直に全城危險に陷るの恐れあるも内城外郭の區別ある複郭城は防禦上利便多しとあるが如く本城の初期に在りては武器の發達幼稚なりしも戰國時代に及び

弓矢鐵砲の發達に伴ひ複郭式を要するのみならず其外郭著しく屈折の度を增し以て襲來する敵を城郭側面より狙擊するの要を生ずるに至りしに由る。

本城の内城に相當するものは最後の防禦地なる月山頂上の甲ノ丸、即ち一ノ平、二ノ平、三ノ平之れなり、富田川を外部防禦の第一線とし之に臨みて建てられたる外郭は御子守口及菅谷口にして千疊ヶ平、馬乘馬場等をも包含す、其の長さ千七百二十七尺ありと之れ主として本城北方の防禦外郭なり、南方の外郭は塩谷口にして其延長四百五十八尺あり、此兩外郭の間は今日石垣の全部を認めざるも天險の地勢を利用せしは明瞭なり、以上外郭の内御殿平あり、此御殿平の内郭は西北面に於ては前記外郭と二重の郭を構成せるも東方面に於ては山勢峻嶮なるを以て外郭の設けなし。

三、富田城の通路＝抑々本城内に入るに三條の口あり而して北方新宮谷の方面よりする菅谷口を本道とす、前面の平地には尼子屋敷の遺址あり、明治初年頃迄矩形の大なる土居をなし堤上老松數株蓊鬱たりしが耕地開發の爲め遂に其遺影を視ざるに至れり、其の内部は則ち尼子家の館跡にして所謂里御殿なり、此附近に蓮池存せりと傳ふ。蓋し外濠の

殘りしものなるべし故に菅谷口の大手門を又蓮池口御門と稱せり、此より少しく進めば道路二條に分れ其の東方谿谷に添へ漸次小坂路を登れば御殿平西側内郭に出で、本谷に出づれば富田本城の大手口に通じ御子守口及び塩谷口よりの道路と合す。

次に南方塩谷口の谿谷に入り東北方に進めば塩谷口外郭の外側に出で菅谷口の冥道に合す。

正面なる廣瀬町方面よりするものは御子守口なり、今の御子守神社の丘地と千疊ヶ平南端の出丸との兩丘によりて作られたる峽地は當年の御子守口にして本城入口としては最も適當のものなりしなり、岩倉寺の背面丘上を能樂平といふ尼子氏の盛時能樂を興行せし歡樂境なり、此れより西南稍低き接隣地を御茶庫といふ、之れ尼子氏茶庫の存せし地にして先年地崩の際此處より古き茶壺を發見す、御子守口より中谷を上れば本城大手口に於て菅谷口、塩谷口より登れる軍道と合す、中谷には鍛冶床の遺址を存す之れ當城の武器製造所たりし鍛冶床なりといへり。

菅谷口にある菅谷川に沿ふて進めば城山の北麓に接する新宮谷に入る、新宮谷は中山なる小丘によりて二分せらる、北方新宮谷は經久の次子國久の邸宅を構へし處にして富田城外城の防備に任ず、其邸址は今や水田と化して丘腹に在り、尼子氏の別働隊新宮黨の勇名を轟かせし所なり、南方の新宮谷は富田城山と相對す、其の山麓に山中幸盛の邸址あり其の附近に山中家の墳墓及小祠を存す、中山に兩新宮谷の武士邸を瞰下する要地たるを以て此處にも出丸の趾を存ず、其の他今の飯梨村地方富田川流域の丘腹には龜井屋敷を初め尼子重臣の邸趾點點散在して今は田畑となれるもの多し。

富田城の部分的構成

其の一

一、外郭の防備形式＝本城は天然の峻嶮を利用したる複郭式山城なれば其の防禦の第一線を富田川に取り第二線の防備は外郭を以てし築城工事は土壘の表面と石垣にて固むるか或は崖を削り立て其の上部を石垣にて築きたるものなり、斯く土壘を本體とし表面のみを石垣としたる城壁にては勢ひ支那の如く臺座を突出せしむること困難なるを以て武具

として鐵炮等の行はるゝ時代となりては城壁を曲折せざれば不利甚しきものあり、萬一城壁の一角を敵に占領せられたる時は敵其の一角に據りて城壁上を遠く見透しつゝ自由に掃射し得るを以てなり、外郭の屈折あるは之れ敵をして外郭に近かしめざる爲めにして敵若し外郭に迫る時は何れの方よりも掃射を免るゝ能はざればなり。

次は石壘の構造なり、石壘を築くは襲來の敵をして容易に攻め上ること能はざらしむる防備の目的を第一とし城郭の莊嚴を誇り堅固安定の觀を粧るも第二の目的にして石壘の勾配も亦研究の價値を有す、其形式に三種あり、即ち直立式、斜面式、凹形式之れなり、本城の石壘を檢するに高きものは斜面式を行ひ低きものには直立式を用ひ凹形式即ち「扇の勾配式」を用ゐたるものなし、故に此石壘形式より觀るも當城の石壘は尼子氏及び其の以前に於て築かれたるものなることを判定せらる。

二、千壘ケ平並に其附近＝千壘ケ平、馬乘り馬場を包含する本城の外郭は其の延長實に千七百二十七尺に及ぶ、此以外に尙ほ石壘の外郭は大皷壇の南方丘峻傾斜面にして長く延長せしが往年岩倉寺石垣工事の爲め此部の石垣を利用し爲めに今日は其形跡を認むる能はず、此外郭千七百二十七丈の間に於ける出丸の築造は現存せるものより推定せば想像せらる、此七ケ處の出丸中尤も工事の精密にして且つ規模の整頓せるは最南端御子守口を扼せる出丸なり、此出丸は前面幅三十尺奥幅東邊は五十二尺西邊は六十二尺ありて高き石壘の上に立つ、石壘下更に矩形の平地を作り其外壁に又高き石壘を築き其左部は天然峻嶮の土壘に接續せるを以て御子守口の關門を守れる出丸としては實に壯大のものなりしならん、之れに連續する西方富田川流域に臨める外郭は尤も曲折に富み此線にある出丸は實に六ケ處に及ぶのみならず外郭の曲折は天然險要の地勢と順應せるが故に一層防備完全なり、此等石壘の高さは八、九尺を通常とし其外側下部は急角度の峻坂にして高きは數十丈の天然土壘を利用せり、此外郭石壘の上には全部土居を廻らしたるものと察せらる。

以上の高き外郭によりて直接防備せられたる地域は千壘ケ平、大皷壇、奥書院、馬乘馬場にして奥書院の外は殆んど皆同一水平面にあり、獨り奥書院址は此等平地の東部に在りて地盤他に比して約四尺高し、以上の舊址には礎石瓦片の數多を殘存す。

三、塩谷口方面＝月山と其の南方の山丘によりて挾まれたる峽谷は即ち塩谷なり、此入口には當時城門の防備及び武士邸等ありしならんも現時は總て耕地となれり、東方に進むこと約二丁許にして本城に向ひ小峽谷を上れば坂路峻嶮にして塩谷口の外部大手門に出で菅谷口御子守口の軍道と合す。

塩谷口の外郭は東方の傾斜面と接續し西方に突出せる天然土壘を基礎として直立式の石壘を築き立て中部の地點に於て方九尺の出丸を構へ其礎石顯然たり、出丸の外部には更に高さ二尺長四十尺の石壁より成る複壘を以て出丸を包む、此外郭塩谷方面に對しては又長さ八十九尺高さ十三尺の石壘を構ふ、此等壘壁は上面平坦にして其幅二十七尺あり内部は東端に於て高二十一尺西端に於て高さ十六尺の土壘急傾斜を以て御殿平の平地に接續す、此外郭より約九尺低く西方に向て突出せる天然土壘を基礎として更に六尺許り前方に屈曲せる外郭を作り其西部の突端に出丸を作り塩谷口方面の外郭を形成す、其の延長百七十二尺を算す、外面は直立式の石垣を以てしたれば世に之を「大石垣」と稱す、其の高さ東部二十八尺西部十五尺あり、内面に出丸の石垣高さ三十九尺ありて北方御殿平外郭突端と相對し以て本城の大手口をなす。

以上塩谷口方面の外郭は本殿及び御殿平の南方外郭となる、故に塩谷口は單郭式にして防備薄弱の感あるも此方面には前述の如く入口に於て相當の防禦策ありしならん。

其の二

一、内郭＝本城外郭は殆んど皆其上部を削平し外部には石壘工事を施せり最も顯著なる内郭は御殿平の四圍にある壘塞なり、此御殿平を古圖には山中御殿と記せり、山中御殿とは山中に構へたる尼子家の御殿の意にして山中幸盛邸と混同するは非なり、蓮池口に接する尼子家の里御殿と對稱したるなるべし。

尼子家の興隆に伴ひ千疊ヶ平の東部に奥書院を新設し更に非常の時變に備ふる爲め此山中御殿を增築せしならんか、之れ通稱御殿平の地域にして最も堅固なる外郭を圍らし富田城の大手口を扼守すると共に背面には富田城山を控えたれば本城中尤も主要部を占むる内郭に相當するものなり。

御殿平は平地は高サ二尺五寸乃至三尺の石壘によりて二段となす、上段は城山々麓に

接するを以て上御殿平といひ低きを下御殿平と稱す、東北方は全部嶮岨なる丘谷を控え石壘及び出丸を以て之を守り西方は天然土壘又は石壘を築き南方の突端は大手口城門の一部を形成す、菅谷口より登れば此御殿平西方石壘の下に通じ東に迂回して大手口に出づ此附近に大なる軍用井あり。

御殿平西北方城壁は細心の注意を以て築城せられたるものなり、西方は一直線形に城壁を築き上面幅十七尺外面長さ九十四尺末端に於て直角形に屈折し北方城壁を形成して出丸に接續す、此北方城壁の外部延長百六十三尺内部百四十四尺上面の幅稍狹くして東方出丸に接續す、城壁頂上の幅は日本に於ては三間を通例とするも本城壁の厚さは十七尺あり一尺許り狹し。

以上の北方城壁の外部には平坦なる軍道を備ふ其外側面は切岸を作り其傾斜面高さ三十二尺を以て下段の平地なる御殿址に接續す此方面の防備は最も嚴重にして其築城法式恰も御子守口出丸築造法と同一なり、此城壁に接する東端に凸字形の出丸あり出丸は北方に於ては高さ十一尺の石壘を築けるも東方は急斜面を有する谿谷なるを以て丘腹上更

に高さ二十一尺の石壘を作り内部も石壘を以て築き立てたる袖壁を作れるを以て凸字形の此出丸は恰も普通方形の出丸を對角線的に二個連結したる感あり、本城中此の特殊の構造を有する出丸は他に類なし。

右城壁も約四尺許りを隔てて東方に長さ二百四十尺の城壁あり山麓より六十六尺の地點に於て南方に屈折す、城壁の外面は高さ約六尺の石壘を以て急斜面の丘谷に接し上面は幅十尺許りの軍道を設く、此城壁と前記凸字形出丸の間に約四尺許りの搦手口を設く、本城壁は西部城壁に比すれば堅牢ならざる爲にか此城壁と平行に隣接して又城壁を設く從つて此方面には内外二重の城壁を駢置せることゝなる、殊に内部城壁は北面側面共に石壘にて築き西端には高さ十五尺の石壘上に方二十尺の出丸を置き外部城壁の延長百五十尺あるも山麓より四十五尺を隔てる地點に於て止む。

以上は御殿平下ノ段東北西の三方面を圍繞せる城壁構造にして其西南部は高き傾斜ある天然土壘の上に屈折せる石壘長さ百四十七尺のものを築き低きは六尺より高きは三十尺に及ぶものあり。

上段御殿平の北方防備は下段御殿平の東部城壁なる内外二重の城壁によりて護られ西端出丸より南方に長さ五十一尺の石壘を築き更に西方に向て直角に屈折すること七十九尺更に直角に折れ南方に突出すること百九十一尺にして其突端は出丸を作り大手口の城門壁となす此部に於ては高二十五尺の傾斜式の石壘をなす、之より北部に至るに從ひ土壘の地盤漸次高まるを以て石壘は漸く其高さを減じ六尺乃至二尺五寸となる、以上の大手城門の出丸は幅十六尺長さ三十六尺あり城壁は之より以東は直線的に作られたるも今は土壘のみ存す、御殿平は本城構成上に於ける主要部にして上段は城主の居館にして莊嚴に建築せられたるものなるべく、下段は附屬館舍のありし處ならん、此段の東北隅出丸の下方内側に幅四尺長さ五尺の古井を存す、以上城山麓方面一帶を除き南西北三方面の城壁延長は實に千五百六十尺に及ぶ一帶の地盤高くして而かも此長大なる城壁を以て圍まれたる居館が威風堂々四隣を壓し十一州の大守貳百萬石の大城主たることを想はしむるに足る。

其の三

一、甲の丸＝御殿平の東方に本城登城口を設く其途紆餘曲折世に之を「七曲り」と稱す頂上は海拔五百九十メートル山城としては他に類例尠き天險の城塞なり、丘腹に堀尾家御家騷動の記念なる親子觀音あり、先年此附近より軍器用の砥石を發見せり、其上中腹に山吹井なる軍用井ありて今も清水混々として湧出す、軍道の傍には高さ三尺乃至七尺の高さに石壘を築く此處に嵐ヶ峠と稱する人工的大なる削平地あり長さ百四十二尺幅最狹十五尺最大百三十九尺あり此最大部は大部分高さ三尺乃至六尺の石壘を築き眼下の山容削るが如く急峻にして脚下に塩谷口を瞰下す、其附近一帶には矢竹叢生して當時の軍器の充實に心を用ゐしを察せらる、此邊瓦片の山積せるを見れば當時相當の建築物ありしを想はしむ。

頂上は則ち甲ノ丸にして一ノ丸、二ノ丸、三ノ丸に區別す、三ノ丸は北方凡て石壘を以て築き立て人工的に削平す、東部二ノ丸に近く二井相對して存在す一は丸井にして徑二尺五寸他の一は長方形にして長三尺幅四尺あり、此三ノ丸の幅最大六十尺長さ二百六十四尺あり。

その東方に接したるは二ノ丸にして四圍石壘を以て築き三ノ丸と連接する部に於ては高七尺あるも一ノ丸方面の部は高さ二十尺あり、二ノ丸削平部は略ぼ楕圓形をなし長徑九十二尺短徑五十一尺あり。

二ノ丸と其東方一ノ丸とは小丘谷を以て連續し其間兩平地の間隔二十五間あり、此丘谷より小徑を辿り北方に降れば尼子氏に關係深き鉢屋ヶ平あり。

一ノ丸は二ノ丸の東方に位し其地位も二ノ丸より稍高く殊に東端は更に一段高くして此處に勝日高守神社鎭座あり、西方二ノ丸に對する側面には高十尺の石壘を築き又南側面には高さ六尺の石壘を以て之を固めたり、平坦部全長五百六尺幅東部に於て最大六十三尺中部六十九尺西部五十尺あり、西部北側には山中幸盛の記念碑あり其附近に十一尺、八尺八寸、八尺五寸周りの老松あり其他一ノ丸、二ノ丸、三ノ丸には現時櫻と楓とを栽植し公園となし四時遊覽者常に絶えず、一ノ丸背面は急峻削るが如く直下幾十丈の丘谷に臨む、此の丘谷を隔てたる東北には更に高き日向ヶ丸ありて本城背面の防備となせり。

安土、桃山兩築城以前の日本築城は天嶮主義の防禦を重んじたるものなり、本城も亦山河の形勢丘峻沼澤等の天嶮を巧みに利用して防禦の策を立て古來幾多の名將勇士が優越なる才能を發揮せるを偲ばしむ、之を支那に於ける圍郭主義の築城則ち人工主義とは當に正反對の現象を見る。

城郭は武家時代の代表的史蹟なると共に實に武家時代精神の權化なれば我文化史的研究資料としては重要なる地位を占むるものなり、單に之を建築土工の技術より見るも又其軍事的防備の點より見るも幾多の特色を有し之を海外諸國の城郭に比するも頗る異彩を放てるものあり吾人は之を以て我國特殊の史蹟として大に誇るに足る可きものと信ず、殊に富田城の如きは山城式築城期の最末期に完成せられ然かも山陰山陽十一州の大領土を背景として築かれたる山城として傑出するものあれば特に保存の要ありと認むるものなり。

軍用井戸調査

一、山吹井戸　直徑　三尺

二、山中御殿下の井戸　直徑　七尺
三、本丸趾井戸　直徑　六尺
四、同　直徑　三尺五寸

富田城趾石垣調査

場所	測點箇所	石垣長さ	石垣高さ	備考
搦谷口	四號	四二尺〇〇	四尺〇〇	
同	同左手	四六・〇〇	四・〇〇	同じ方向に小徑を經て
同	一七號より七號	五六・一〇	二五・〇〇	
大東成	一〇號	二四・〇〇	一二・〇〇	
同	一一號	八・〇〇	一二・〇〇	
馬乘馬場	一〇號より一一號	一五・〇〇	八・〇〇	
同	一一號より一二號	一七・四〇	八・〇〇	
同	一二號より一三號	一八・〇〇	一二・〇〇	
同	一三號より一四號	九・〇〇	一二・〇〇	
同	一八號より一七號	二〇・四〇	九・〇〇	
大鼓壇	一三號より起點二號より三號へ	六二・七〇	二一・〇〇	
同	三號より	二三・一〇	二一・〇〇	
千疊平	周圍五號	一三・二〇	九・〇〇	
同	一一號より	一〇五・六〇	五六・〇〇	
同	一二號より	二三・一〇	九・六〇	
同	一三號より	五九・四〇	九・六〇	
同	一四號より	二五・四〇	九・六〇	
御殿跡	月山上り口三〇號より起點四號より	二〇・〇〇	二八・〇〇	
同	同　五號	一二五・〇〇	二八・〇〇	
同	同　六號	二九・七〇	二〇・〇〇	石垣下に軍用大井戸有り
同	御殿内部石垣一號	七九・二〇	五・〇〇	
同	二號	五九・四〇	五・〇〇	
同	四號	二五・四〇	一四・二〇	
同	一〇號	九二・四〇	一八・〇〇	

同	一一號	六二・七〇	一八・〇〇	
同	一二號	四六・二〇	一八・〇〇	
稻荷社	一號	二八・四〇	一〇・〇〇	
同	二號	二八・四〇	一〇・〇〇	
同	三號	一六・五〇	一〇・〇〇	
同	四號	一三・二〇	一八・〇〇	
同	六號	八二・五〇	一八・〇〇	
月山口	五一號起點となる一號より二號	一六・五〇	一五・〇〇	
同	二號より三號	二六・四〇	一五・〇〇	
同	三號より四號	三六・〇〇	一五・〇〇	
同	六二號起點となる	—	—	
同	一一號より	五二・八〇	一〇・〇〇	下方に石垣の崩れ點々とある
月山二ノ丸口	五八號より起點　七號より	三〇・〇〇	二五・〇〇	石垣の崩れあり
物見櫓趾	月山口五一號より起點　二號	三九・六〇	六・〇〇	同
同	六號	九二・四〇	二四・〇〇	
月山口	三五號より起點となり三號	一九・八〇	一八・〇〇	御殿趾大石垣

同	四號	一六・五〇	一八・〇〇	同
同	五號	二三・一〇	一八・〇〇	
同	六號	六六・〇〇	一八・〇〇	下道より石垣の崩れ點々とす
同	八號	四六・二〇	一八・〇〇	
同	九號	七五・九〇	三〇・〇〇	
同	一〇號	二三・一〇	二四・〇〇	
同	一一號	三三・〇〇	二四・〇〇	
同	一二號	三〇・〇〇	一八・〇〇	

堀尾吉晴之墓石調査

一、正面臺石一五尺（前）一三尺（横）下の段高さ四尺二寸

同　一五尺（前）一三尺（横）上の段高さ四尺二寸

二、前にある臺石一一尺四寸（前）四尺三寸（横）高さ三尺三寸

三、井垣左より六尺、一尺九寸（此れが入口の如くなる）右手六尺井垣となる

四、中央墓石臺石高さ六寸長さ（前）二尺八寸二分

イ、中央墓石下より一號

五尺四寸（前）五尺四寸（横）

ロ、同　二號

四尺五寸（前）四尺五寸（横）二尺八寸二分（高）

ハ、同　三號

丸石　周圍　一二尺　高　三尺

ニ、同　四號

三尺九寸（横）三尺（高）

ホ、同　五號

周圍　六尺　高　三尺

笠石　幅員　六寸六分

昭和九年四月一日印刷
昭和九年四月五日發行

編輯人　島根縣能義郡廣瀬町　並河榮四郎
同　郡
發行人　島根縣松江市雜賀町八　廣瀬町月山保勝會
印刷人　島根縣松江市殿町三八三　三島藏市
印刷所　松陽新報社
發行所　島根縣能義郡廣瀬町役場内　廣瀬町月山保勝會

終